

久留米市の柿

久留米大学留学生別科

A クラス 215BB02

趙弘晨

1. はじめに

柿という果物は皆きつと食べたことがあると思う。私の故郷、中国の北京でも柿が売られているので、小さい時からよく食べている。しかし柿はいくつかの種類があるし、食べ方も違いがある。北京でよく食べていたのは渋柿である。とってから食べられるまで長い時間待たなければいけない。食感もやわらかくて、あまり甘くないので私は好きではなかった。以前日本に一年間住んだことがあったが、好きではなかったので、柿を買おうと思ったこともなかった。久留米に来たら、スーパーに柿がたくさん並んでいて、しかも価格は安い。シャキシャキの食感ですごく甘い。一度食べたら、すぐ好きになった。柿に興味を持って、このレポートで久留米の柿の歴史と現状及びこれからの発展について述べたい。

2. 背景

久留米市の柿といえば、田主丸町は久留米市の中で一番柿を生産している町である。2015年11月、私は田主丸で開催されたイベントに参加した。ちょうど柿の試食会なども行われていたので、いくつかの農家を巡って、たくさん食べた。同じ地域で育てられた柿でも味に違いがある。

柿の品種は多く、1000 を超えるともいわれるが、渋柿と甘柿に大別される。渋柿は実が熟しても果肉が固いうちは渋が残る柿である。甘柿は未熟の時渋いが熟すに従い渋が抜け、甘みが強くなっていく。

久留米市では「西村早生、早秋、太秋、富有」などの柿が栽培されている。さらに福岡県が品種開発した種無し甘柿の「秋王」へ改植を誘導しており、苗木の導入支援等を行っている。

さらに、JA や市場等を通じて販売するだけでなく、田主丸地域を中心に柿の観光農業が盛んであり、福岡県都市圏の消費者へ向けた PR や、農家レストラン等による魅力づくりを推進している。

「福岡県農業統計調査」、「福岡県農林水産部畜産課調査」による、久留米の主要品目の生産状況という表をみると、久留米は平成 24 年まで柿の生産量は県内 3 位である。平成 20 年から平成 24 年まで他の農作物の生産量は大きい成長がみられるが、柿とブドウは減少する傾向がある。柿を久留米で発展させるために、どのような企画があるのだろうか。久留米の柿について調べてみようと思う。

3. インタビュー

以下は市役所ホームページで農政課が発表した久留米市食料・農業・農村基本計画の第二章食料、農業、農村の現状と課題、及び資料編を読んだ上で考えた質問である。以下の質問の「資料」はすべてこの二つの資料を指している。インタビューをする対象は市役所農政課の職員である。

質問1) 「主要品目の生産状況」という表で、平成22年から平成24年のデータによりますと、久留米市の柿の生産量は県内第三位を維持していますが、実際の生産量は減少しています。減少している原因は農業就業人口減少のほかにも理由がありますか。平成27年は同じく減少していますか。

回答：やはり需要の問題だと思います。柿という果物は久留米市では昔からあるもので、よく食べられますし、昔、近所の人からももらえました。ですから、個人の考えですけど、特に柿に対しては需要はそんなに多くないのではないかと思います。そして、おっしゃる通り、今、農業をする人は減っていますから、生産量も減っているわけです。

質問2) 田主丸町の柿は福岡県内では県民によく知られていると思います。でも田主丸町の柿はまだ全国に流通していないと思いますが、知名度を高めるために、農政課は何か対策をとっていますか。

回答：今、久留米の柿の生産量は県内では食べきれないほど多いから、ほかの国や別の都道府県にも売りますが、遠くの場所に持って行くと、コストが高いし、その地域の近くのライバルには勝てません。今、久留米市は確かに柿についてのPRをしています。そしてこれからの生産量は少しずつ増えると思います。

質問3) 久留米市の柿はほかの都道府県で販売していますか。販売しているなら、評判はどうですか。

回答：もちろん販売しております。関東や大阪、そして岡山でも売っています。評判はわからないですね。私たちは柿をある店に売りますが、そこもまたどこかに売るかもしれません。ですから統計しにくいです。

質問4) 久留米市は柿をメインの農作物として、柿の栽培面積を拡大する予定はありますか。それとも今の状態が一番いいでしょうか。

回答：そうですね。久留米市は全部、柿を植えているわけではありません。平原地域では主に田んぼでお米を作っています。そして野菜も作っています。柿を植えているのは山のほうです。たとえば田主丸町ですね。そのもっと上にはうきは市と朝倉町があるから、その辺りは福岡県内で柿の生産量一位と二位です。生産は需要によって調節するものだから、やはり需要次第です。

質問5) 資料によると、久留米市は中国へ農産物を輸出しようとしたのですが、検疫の問題などで難航しました。そして検疫の障壁の低い香港を対象に連携を組んでいます。

資料には書いていない平成25年から平成27年はどのようにになりましたか。もし、輸出ができていたら、輸出量はどのくらいですか。もし、輸出できていない場合、その理由は何ですか。今後はまた中国への輸出を考えていますか。

回答：世界各国には日本の農作物の輸入に対しては違う基準があります。(対照表を見ながら) ご覧の通り、香港は日本の農作物や果物に対する輸入基準はすべて二重丸でございます。今も香港を対象に輸出をしています。でも、中国は日本の柿に対する基準は三角形で表記しているの、それは基準を定めていないという意味です。柿を好きだというのはすごくありがたいと思います。

久留米は中国の合肥市とは友好都市です。そこでイベントを行うときも柿を持って行きました。その人たちも柿をとっても好きで、甘くて直接食べられる柿は食べたことがないと言いました。ですから、私たちは海外ではそういう需要があることを知りまして、農家の人たちに伝えれば、たぶんこれからの生産も増えるのではないかと思います。でも中国への輸出は確かに難しいですね。

もし何年か後に基準が変わりましたら、可能性はあるかもしれません。

4. まとめ

今回、柿に関してインタビュー調査を行ったら、予想と違っていることが数多くあった。市役所の方との会話の中でも話したが、昔と違って、今の日本人はなんでも食べられるようになっている。柿は昔から日本に存在する果物で、全国で生産されている。中国人は食事が済んだ後、良く果物を食べる。しかし、日本人は食事の後でよくデザートを食べる。なので、果物の需要は昔より減っている。それは柿の生産量が減る原因の一つである。しかし、私は久留米の甘柿が大好きなので、柿の宣伝についていくつかの提案をしたい。今、中国でも世界中の果物が食べられるようになった。日本の甘柿は甘くてシャキシャキして、とても美味しいから、中国に輸出したらきっと売れると思う。しかし、地震によって福島原子力発電所の事故から、中国は日本に対して農作物の輸入

基準をさらに厳しくした。なので、中国の観光客を増やすために、合肥市との交流のチャンスはとても大事だと思う。一度味わったことがある甘柿を食べるために、久留米市にフルーツ観光に来る人もいるのではないだろうか。久留米大学と久留米市日中友好協会が開催した柿狩りの活動も久留米市の柿を宣伝できるいい機会だ。久留米市の農作物は豊富で、季節によってナシやブドウに関しても様々なイベントが行われている。それをインターネットに載せてもっと宣伝したら、いい効果があるのではないだろうか。私自身としては、久留米にいる間、久留米の果物を存分に味わいたいと思う。

参考文献

久留米市ホームページ 『第2期久留米市食料・農業・農村基本計画』

<http://www.city.kurume.fukuoka.jp/1070sangyou/2020nourin/3150nougyou/index.html>

(2015年12月4日参照)